

安樂死

西村寿行



死樂女

西村寿行



サンエイノベルス

安楽死

西村寿行
にしむらとしゆき

発行責任者 小野田 政

編集責任者 塩田 廣 八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 有限会社 誠幸堂

発行所 株式会社サンケイ出版

東京・千代田区神田錦町三の二五(101)
大阪・北区梅田二の四の九(530)

乱丁・落丁本はおとりかえします

目次

第一章 影を失った男 7

第二章 美しき潜水者アクア・ノートの死 19

第三章 乱脈の背景 48

第四章 天 龍 峽 74

第五章 動機のない殺意 97

第六章 安楽死法廷 120

第七章 新たな疑惑 153

第八章 深海の洞窟 184

第九章 非情の動機 214

書下ろし長編推理

安
楽
死

トロリとした油にくるまれたようなむし暑い、お
そい夏の午後だった。

もの音で、子供は汗ばんだ睡りから醒めた。饅え
たような消毒液（シユウイキ）のにおいが肌の汗にまじって部屋に
こもっていた。子供はそのにおいをかいで急にわけ
のわからない不安に襲われ、泣きだした。さみしい
のだった。クレゾールのにおいは医師のにおい――
そして、医師と薬のにおいは、母のにおいであつ
た。乳房の甘ずっぱいにおい、腋臭（ヨクシュ）の、そして肌着
にしみ込んだ母のにおい……。

かすかなうめき声が聞こえた。猫が犬と睨み合っ
たときのような、重苦しくくぐもったおそろしげな
うめきだった。うめき声は窓際から聞こえた。半分
は錆びた鉄製のベッドからうめきが洩れ、それに分
厚い背中を見せた男の人がおおい被さるようになって
いた。子供は、母を呼んだ。ベッドでうめいている
のは、母親だった。意識がしだいにはっきりして、
母親の白い素脚がもだえるのが見えた。窓からの陽
光が、母に被さる男の後ろ姿を影絵（シヅメエ）のようにおそろ
しく大きく見せた。

子供は泣き熄（ヒト）んだ。なにかはしらぬおそろしい緊
迫感が部屋に充満していた。

だれも、喋（シヤベ）らなかった。波のように高くせり上が
り、吐息をつくように低く引いて行くうめきに合わ
せて、ベッドの軋む金属音が悪夢のように子供を
おびえさせた。男の体の下で母の白い脚が空を蹴っ
て、そこにある、目には見えぬ透明体を破ったよう
に見えた。

へお願いします――↓

だれかが、岩に押し潰されたような声を出した。
おねがいします、お、ね、が、い、し、ま、す――
そのしわがれた声が、放たれたリングが重なるよう
に子供の耳に溜まった。人影が動き、むし暑い熱気
に混じる薬のにおいが、ふたたび子供を包んだ。子
供はだれかに抱かれたまま、ベッドの側に連れて行
かれた。そこにいたのはいつもの母親ではなかつ
た。瘦（ウソ）せた青白い顔に鬱血の筋が走って、額には糊
のような汗が陽にねばり、髪が汗にねじ伏せられて
いた。瞳は貝の蓋のように閉じたまま、眼窩が深
く落ちていた。子供はおびえて後ずさりした。いつ

ものやさしい母親のかわりに、ときおり夢にみるおそろしい生き物がいた。

だれかが、うちふるえる母親の腕を子供に握らせた。熱い、燃えるような掌だった。子供は泣きかかった。泣きわめいて母に縋りたかったが、そうはさせない何かが、子供の胸をふさいでいた。子供は、あぶら汗を浮かべて母を見ていた。白衣を着た男が、母の瘦せた細い二の腕に注射針を突きたてたのが見えた。子供は、ビクッと瞳をふるわせた。斬られたような痛さが心を走った。その痛さは茅の葉で皮膚を切ったときのあのザリッという音を思いださせる恐怖感と同じものだった。

母のうめきは、ゆっくり熄んだ。子供は、仮面を脱ぐようにいつものやさしい母に戻りつつある顔を見ていた。ゆがんだ顔の筋が一本ずつ解け、やがてそれが顔全体に行きわたったときには、母はさんごううめいたことを恥じてはにかんでいるような、静かな表情になっていた。

子供を抱いていた女の人が、泣きながらいった。
へさあ、お母さんにさよならを……

女の人は、子供の顔を覗いて、言葉を呑んだ。子供の瞳には表情がなかった。瞳孔が拡散しているような感じで、子供は何も見えてはいなかった。澄んだ清流のような青い瞳は凍っていた。凍った瞳の膜に、あちこちのひび割れを紙で貼り合わせた窓ガラスから射す陽の箭が映っていた。

子供の瞳は凍ったままだった。ものもいわない。唇は動いても声が出ないのだった。言語障害を起した子供は、翌年の春、覚えてたの文字であめのうおの仔の詩を書いた。

家の側を流れる川の暗いふちに独りぼちのあめのうおの仔が棲んでいて、その仔が太陽の光を求めて上流に旅をするというものだった。やがて広いふちにあめのうおの仔は無数の光をみつけ、腹いっぱい食べた。食べても食べても光はなくならず、太陽が消えると、夜は月の光があめのうおの仔の腹に宿った。ぼんぼりのように体が光ってあめのうおの仔はしあわせだというのだ。

光はお母さんだとあった。

第一章 影を失った男

1

非番の日曜日の午後に馳りだされて、若い檜山巡査は機嫌がよくなかった。それも、ただの日曜日ではない。九月二十日、すなわち、檜山巡査の誕生日である。

警視庁公安部の情報では、先週の日曜日に起こった新宿の歩行者天国における騒動に引き続き、今週も日曜の夕刻、同じ場所ですら騒動の余波が計画されているという。

右にしろ左にしろ、集団が個人の権利を脅やかすというのは、檜山にはにがしかった。とくに、誕生日の非番においてはなおさらである。

「なんだ、あいつは？」

同僚の高田巡査が顎をしゃくった。高田も非番である。

騒動どころか、アジテーターらしい人物の影もない雑踏を、一人の男が歩いてた。人波にもまれて、男はま

るで夢遊病者じみた感じで、ふらふら歩いていた。

「酔っぱらいらしくもねえな」

「やれやれ、おれは一足先に連絡に帰ってるよ」

高田がそういつて交番に引き返したあと、檜山巡査は男の後をつけた。男は、大久保方面から坂を登って三光町の交叉点を過ぎ、新宿駅前通りと明治通りのクロスする街角に向かって、ふらふらと歩いた。檜山は腕時計を覗いた。午後八時前である。もうこの時刻では騒ぎの起こる可能性は少ない。

男は、交叉点の角にあるビルに辿り着いて、大理石の壁面に体をもたせかけ、はっと一息——というしぐさをした。その動作が、まるで遠い国からずっとそうやって歩き続けてきたとでもいうように、檜山には見えた。

三十前後、そんな年頃だ。おとなしそうな風貌だが、顔色はひどく青ざめていた。ネオンの明滅がそう見せるのかもしれないが、しかし、ともかく男の顔には困憊の気配がただよっていた。

男は、目を閉じたままだった。

しばらくたって、男はものういような動作で後頭部に手をやった。男の後頭部に傷のようなものがあるのは、

職掌柄、檜山は気づいていた。ワイシャツの襟が血で汚

れているのだ。だが、たいした傷ではない。男は、掌に付いた血を、ぼんやりと眺めていた。ポケットを探り、チリ紙らしいものを取り出して掌を拭き、それから、入念な動作で、ポケットというポケットを探りはじめた。

檜山は興味深そうに見ていた。男はまともな勤め人らしく、服装はととのつていた。夜の盛り場をほつつき歩くのにキチンとネクタイを結び、隙がない。しかし、にもかかわらず、この遠い国から歩き続けてきたような足取りと、動作の裡にひそむ懈怠^{けだ}さのちぐはぐなのが、妙だ。

男は品物を吟味したのち、ポケットに納い、暗然としたように周囲を見回してから、歩きはじめた。その道路をまっすぐ行けば新宿駅である。男は、しばらく歩いて一軒の店の前で立ち止まった。時計店だった。ショウウインドウに等身大の鏡があり、男はそれに向かって自分を写しているようだった。顔をゆがめたり、眉をひそめたりのパントマイムをやっていた。檜山は苦笑した。半狂いか——と思ったのだ。盛り場にはこので人間はめずらしくはない。しかし、それにしても服装に隙がない

のは妙だと、男に近づいた。

「ちょっと、君——」

声をかけると、一瞬、男は逃げ腰になった。檜山は、その肩をぐいと掴んだ。男は、ひえッというような短い悲鳴を上げた。

「どうしたんだね、いったい」

檜山は、男の顔を覗いた。夜目にもわかる病的なあぶら汗が男の額に浮いていた。焦点の定まらない目だった。

「どうも、しやしません」

「どうもせんことがあるかね。君は頭に怪我をしている。それに顔色もわるい。交番にきてもらおうか」

男の腕を把^とつた。男はすなおについてきた。

歌舞伎町にある警視庁四谷、新宿両署合同のマンモス交番に男を連れ込んだ。

「病気なのかね、君は」

檜山は、男のほおにある重い懊惱^{あうなう}の沈みのようなものを見て、訊いた。

「いえ、ちがうと思います……」

男は、低い声で答えた。

「そいつは妙な返事だな——まあいい。その頭の傷はどうしたのだ。だれかに殴られたのか」

傷はさほど深くはない。頭皮が裂けての外出血、それ出血はもう止まっていた。心配するほどのことはない。

「それが、よくわからないのです……」

「わからない？ 名前は」

檜山はすこし肚をたてた。

「……………」

男は、ぼんやりとした表情で首を横に振った。

「いいかげんにするんだ！」

テールを、ドン！と叩いた。男と同年配の檜山は血の気の多いほうだ。酔っぱらい、売春、暴力バーのいざこざ、喧嘩、強盗、火事——夜の新宿は太陽が昇らないかぎり、睡りに落ちない。巨大な悪魔の肚の中に似て、あらゆるトラブルがごちゃまぜに弦をかき鳴らしている。尋常ではつとまらない。

男は、おびえた目で檜山を見た。

「さっき、声をかけたときに、なぜ逃げようとした」

「それは……」

男は、説明しかけようとしてやめた。また叱られるだけだと思った。自分でもわけがわからないのだ。——

最初に目が醒めたのは、警官に声をかけられる前、街角のビルにもたれたときだった。いきなり、そこで目が醒めたのだ。男は、夢ではあるまいかと思った。目が醒めてみたら街角だったなどというのは……。しかも、睡りの淵から醒めはしたが、記憶のほとんどは闇の国に置いたままだった。光と影が回り燈籠のように回転して流れ、その流れがゆるやかになって目が醒め、しだいにものの形がはっきり見えはじめた。光は周辺のネオンサインであり、巨大な蛇のように続く自動車のヘッドランプだった。影はビルや商店、それにひっきりなしに交錯する人波であった。それが、事実なのだ。

「記憶喪失——だとも、いうのかね」

檜山は語調を落とした。そうかもしれないと、思ったのだ。嘘をつくタイプには見えない。額も理知的に広く、膝に置いた手の指はすんなり和白い。

「そうらしいです。自分がだれなのか、ぼくにはわからないのです」

「ほう」

檜山はしかし、警戒する目になった。

「持ち物はどうなんです」

「さっき調べてみたのですが、三万円と少しのお金と、ドアのらしいキー、チリ紙、ハンカチ、それにこの地図のようなものだけなんです」

男は、それらを机の上に並べた。

「くわしく話してもらおうか」

檜山は、男が出した地図を見た。新宿区立体育館近くのアパートを指した略図で、紙の裏にはホテル名と電話番号が書いてあった。ホテルは〈天龍峽ホテル〉。男の背広にはネームが入ってなかった。

「だから、わからないのです。あなたに声をかけられたすこし前に、夢から覚めたように気がついたので。強い船酔いのようなめまいがしきりにしました。それに、頭が痛くて、なにがなんだか……」

男は手の甲で額を押えた。

「それで、記憶のほうはどうなんだね？ 断片的に何か覚えてるだろう」

「ええ、それは——一般的なことは記憶にあるようです。たとえば、海だとか、山、川などの風景は。それか

ら、日本地図など……」

「それ、あたりまえだ。君は日本語を覚えているんだからな」

そういつてから檜山は、それとこれとどんなつながりがあるのかと、自分で妙な気持ちになった。

「他に何か覚えとらんのかね、自分の住んでいた町名とか、家族の名前とか」

「それが、わからないのです」

男は、哀しそうに目を伏せた。

「ここがどこだか、わかるかね」

「東京の新宿だとは、交番の看板でわかりました。でも、新宿というのも遠い記憶の一群の中にあるだけで、なじみのある気はしません」

「弱ったな、かなりの重症だ」

男のもののいい態度から判断して、演技だとは、檜山には思えなかった。男はだれかに殴られるか車にはねられるかして後頭部を打ち、運わるく記憶のある部分が陥没したもののようだった。しかし、檜山は、男の記憶を失うまでの前身は服装やもの腰から判断されるようには決して明るいものではなかったと思った。懊惱の翳りは記

憶を失う前のもので、寡^{さび}れになって表情の下に濃く滲^{しみ}んでいた。

「一般的な記憶はあって、生活圏だけの記憶がないのは、情緒面の陥没というやつだな。それなら回復は早いかもしれない」

興味深そうに二人の会話を聴いていた尾鷲^{おしづ}という年配の太った警官が、回転椅子を回していった。

「おれの知り合いで、やはり頭を打って記憶喪失になった男がいてね、この男はあらゆる記憶をなくしちゃった。もちろん、日本語もだ。見舞いに行ったときには完全な赤ん坊だったよ。ひどいもんだ」

「それで、どうなったのでしょうか……」

男は、不安そうな顔を尾鷲に向けた。

「慶応病院に二年ほど入院してね、さすがは大学病院だ。すっかり元にもどった——といたいのだが、妙なことは、ほとんどの記憶は回復したくせに、友人の顔だけはどうしても思いだせん。糸が切れちゃったんだな。医師もそれだけはどうにもならんということだった。——そのときに聴いたんだがね、記憶喪失にはさまざまなパターンがあるそうだ。ほんの一部から全体ま

で。そして、これは精神病理学でいうところのヒステリー性陥没のようなものもあるそうだ。ものが実際に見えているのに見えなかったり、聴こえるはずが聴こえなかったり——まあ一種の強迫観念のようなものが作用することもあるそうだよ。たとえば、仮性痴呆^{かせいちま}といって、犯罪者などに自分の都合のわるいことはきれいさっぱり忘れてしまうのがあるが、似たような状況でね、現実から逃避したいと強く願っているばあいなどに記憶を喪失すると、情緒面がごっそり陥没するということも考えられなくはないそうだ」

尾鷲は太い指で煙草をくわえた。

「では、治るんですね」

男は、継るようにいった。

「治るさ。だけど君はそこに地図を持っている。体育館なら近くだ、そこを訪ねてみたらどうかね。君の家族とまではいかなくても、だれか知人がいる可能性がある。まず身許を捜すべきだよ。そうすれば、医師にかからんでも記憶を取り戻せるかもしれない」

尾鷲は、こともなげにいった。

「だいじょうぶですかね、帰して」

檜山が心配した。

「いちおう指紋を採って照会してみよう。地図の場所までは君が案内してやるんだな。それでわからなければあとは保護を願ひ出るか、その天龍峽ホテルを訪ねるなりして自身を発掘するかは、自分で決めることだ。おとなだし、それに怪我也かすり傷ていだから、心配はないだろう」

「いえ、ご心配なく、ぼくは自分で捜してみます」

男ははいねいに頭を下げた。

「それがいい。どうしてもわからなければ、連絡してくれるといい。指紋の結果が出るからな。それから保護願ひをだしたっていい」

「わかりました」

「それではと、指紋だ」

檜山は両手の指紋を採った。

男は尾鷲に礼を述べて交番を出た。出たところで、なに気なく、慣習的に左の腕を見た。それまでは気づかなかった、ブラチナ色にぶく光る時計があった。カチ、カチ、カチと秒針がせわしなく時を刻んでいた。その動きに、男はふと恐怖を感じた。記憶を失うまでの龐大な

時間が一本のかぼそい秒針の背後に、^{ひび}ずって見えたのだ。それはとうもなく厚い闇で、なぜか、秒針は刻一刻とその闇を消そうとしているように思えた。

2

新宿区立体育館は、パトカーで五分とかからない距離だった。

略図にある目的のアパートは、〈光風荘〉としゃれた名前とはうらはらに、採光も通風も悪そうなモルタル二階建築だ。階下のとつぎに管理人室のプレートがぶら下がっていた。管理人室の前に立って、男は、檜山巡査が来てくれたことに感謝した。自分だけで来て、ベルを押し、ぼくはだれでしょうかと訊ねるのは、かなり勇気の要ることであった。

檜山は、無造作にベルを押した。

男は緊張した。自分の住居の略図を持っているというのはおかしなことだから、ここが自分の住居だとは考えられない。あるいは、ここに越してきたばかりだという想像もなりたたなくはないが、それにしても略図というのは妙だ。いや、紙片には天龍峽ホテルの電話番号が書

いてあったから、そのために持っていたのかもしれない。だとすると、自分がここの住人だという可能性はあるわけだ。それなら、妻が居るかもしれない。ひょっとして子供も……。男は、ドアを開けたとたんに、妻と子供に、お帰りなさい——といわれる場面を想像した。額の汗をぬぐった。

失った影が戻る——その影に男は期待よりもむしろ恐怖を感じた。

ふと、時計店の鏡に映った得体の知れない男のみにくくゆがんだ顔を思いだした。しばらくは、とてもそれが自分だとは思えなかった。まるでなじみがないのだ。同じ嫌悪感じみたものを、妻にも、そして子供にも感じるのではなからうか。

ドアが開いた。顔を出したのは色の黒い四十過ぎの女だった。

「なんのご用ですか」

太くて、邪慳な声だ。男は、思わず尻込みした。

「じつは、このかたが記憶を失いましてね、お宅の略図を持っていたんです。どうです、ご存じないですか」

檜山は、男を前に押し出した。

女は気色わるそうに男の顔を眺め、目を据えたまま、ゆっくり首を横に振った。男は、ほっとして、視線をさけた。この女にあな、たといわれたら、たぶん自分は逃げ出しかねなかった。

管理人が否定したのだから、ここの住人ではない。男はなぜだか、安心した。あとは、自分を見知った者がいるかどうかだ。

「いちおう、各部屋にあたってみます」

檜山は管理人に礼をいって、隣室からはじめた。階下は五世帯あった。反応は、なかった。二階に登った。とつぎの部屋から覗いたのは二十五、六の、ほおに小さなえくぼのほれる女だった。色が白く、愛くるしい。男は、どうせなら、こんな女に見知っていてもいいと思った。女は檜山の説明を聴いて、熱心に男の顔を眺めた。

「知っていますか」

「いえ、ぜんねんですけど」

女は無邪気そうに笑った。前歯の大きな、暗いのが印象に残った。

その隣も、同年配の女性だった。ほっそりした顔の、

受け唇というのか、かすかに欲情をそそられる女だ。女はドアから顔をだして、男の顔を見ると、はっとしたようだった。男も、檜山も、その狼狽を見逃さなかった。

「このかたは記憶を失いましてね、だが、このアパートの地図を持っていた——あなた、ご存じですね」

檜山が訊いた。

「いえ——存じませんわ」

女は視線をさけた。ほおに硬いものが見える。

「でも、あなた、驚いたようでしたが」

檜山は職業意識をだした。

「——昔の、恋人によく似ていたんです。ですから……」

女は、もう男を見ようとしなかった。

「なるほど」

檜山はあっさり切りあげた。あり得ることだというよりも、追及の方法がなかった。女はドアは閉めた。ひどく用心したような、カチッという小さな音がした。

他の三室には、反応がなかった。

二人はバトカーに戻った。

「妙だな——君はこのアパートの地図を持っていた。なのに、だれも知らない」

檜山は、いぶかしそうに首をかしげた。

「だれかに、ここの住人を紹介されて訪ねるところだったのかもしれない。ぼくがもし何かのセールスマンだったとすれば、考えられます」

——外交員だったのだろうか？

「そうだな、セールスマンにしては君は陽灼けしていないが、まあ、そんなところかもしれない。ところで、その天龍峽ホテルを訪ねるのだったら、新宿駅まで送るよ」
「お願いします」

警官が興味を失ったのを、男は感じた。

バトカーは明治通りに出て、強引に混雑に割り込んだ。男は、車窓から周辺の夜景を眺めた。記憶の中に、この灯火の乱れる夜景はない。男は、なぜともなく、たまらないさみしさを感じた。失った影の中に自分はない、を持っていたのだろうか、想いを駆せた。妻、子供、そして両親に兄弟——家もあったかもしれない。勤務先も、もちろんあったはずだ。あるいは独身で、恋人があったのだろうか……。

ブラチナ色のキーを取り出して、凝々と覗めた。いずれにしても、あの街角で自身を発見するまでは、